

# 白氏文集 三十 重賦（秦中吟より）

加藤 淳平

『新樂府』の翌年の白樂天が諷諭詩は、首都長安周邊にて樂天の見聞せる題材を詠じたる『秦中吟十篇』にして、「重賦」はその一篇なり。曾て日本の紫式部、之を讀了せり。

## 重賦

重賦（重き課税）

厚地植桑麻 所要濟生民 厚地に桑麻を植う 要する所は生民を濟ふなり  
生民理布帛 所求活一身 生民布帛を理む 求むる所は一身を活かすなり  
身外充征賦 上以奉君親 身外は征賦に充て 上は以て君親に奉ず

國家定兩稅 本意在憂人 國家兩稅を定む 本意は人を憂ふるに在り

厥初防其淫 明勅内外臣 厥の初めは其の淫なるを防がんとし 明らかに内外の臣に勅す

稅外加一物 皆以枉法論 稅外に一物を加ふれば 皆枉法を以て論ずと

奈何歲月久 貪吏得因順 奈何せん歲月久しく 貪吏因順するを得たり

浚我以求寵 斂索無冬春 我を浚へて以て寵を求め 斂索するに冬春無し

織絹未成疋 縑絲未盈斤 絹を織りて未だ疋を成さず 絲を縑るに未だ斤に盈たざるに

里胥迫我納 不許暫逡巡 里胥は我に納むるを迫り 暫らくも逡巡するを許さず

歲暮天地閉 陰風生破村 歲暮れて天地閉ぢ 陰風破村に生ず

夜深煙火盡 霰雪白紛紛 夜深くして煙火盡き 霰雪白くして紛紛たり

幼者形不蔽 老者體無溫 幼き者は形を蔽はず 老いたる者體に溫かみ無し

悲喘與寒氣 併入鼻中辛 悲しき喘ぎと寒氣と 併せて鼻中に入りて辛し

昨日輪殘稅 因窺官庫門 昨日殘りの稅を輪び 因つて官庫の門を窺ふに

繪帛如山積 絲絮似雲屯 繪帛山と積むが如く 絲絮雲と屯まるに似る

號爲羨餘物 隨月獻至尊 號して羨餘の物と爲し 月に隨つて至尊に獻ず

奪我身上暖 買爾眼前恩 我が身上の暖を奪ひ 爾が眼前の恩を買ふか

進入瓊林庫 歲久化爲塵 進みて瓊林の庫に入らば 歲久しうして化して塵と爲る

（大意） 人民が桑や麻を植ゑるのも、布や絹織物を織るのも生活のためであり、生活の必要を越える

収入によつて君王や親に奉仕する。國が夏と秋の收穫期に徵稅する兩稅法を定めたのは、人民の生活

を憂へてのことであり、當初は濫用を防ぐために、中央と地方の官吏に對して、規定以上に徵收しない

やうにとの勅命があつた。しかしそれから三十年の歲月が過ぎて、貪吏はごまかしを覺えた。今人民

は、次のやうに言ふ。「役人は自分に根こそぎ課稅して、それによつて上のご機嫌を取り、収入の無い

冬や春にも稅を徵收する。絲を繰り、絹織物を織つて、まだ一斤・一疋の量にならないうちに、村長は

納稅を催促し、些かの猶豫も許さない。年の暮になつて曇天が續き、冬の寒い風が荒れた村を吹き抜け

る。夜更けになつて火が消え、雪やあられが白く降りしきる。幼兒は身體を覆ふ布も無く、老人は身體

から温かさが失せてゐる。引つ切りなしの咳と寒氣が鼻に入つて辛い。昨日未納の稅を納めたついで

に役所の倉庫を見たら、絹織物や絹絲が山と積んであつた。役所では餘剩分として毎月皇帝に獻上す

るらしい。俺の身體を暖めるものを奪つてお前がこますりをするのか。宮廷の倉庫に入つたら、どう

せ長い間には塵になつてしまふのに。」

（平成三十年四月九日受附）